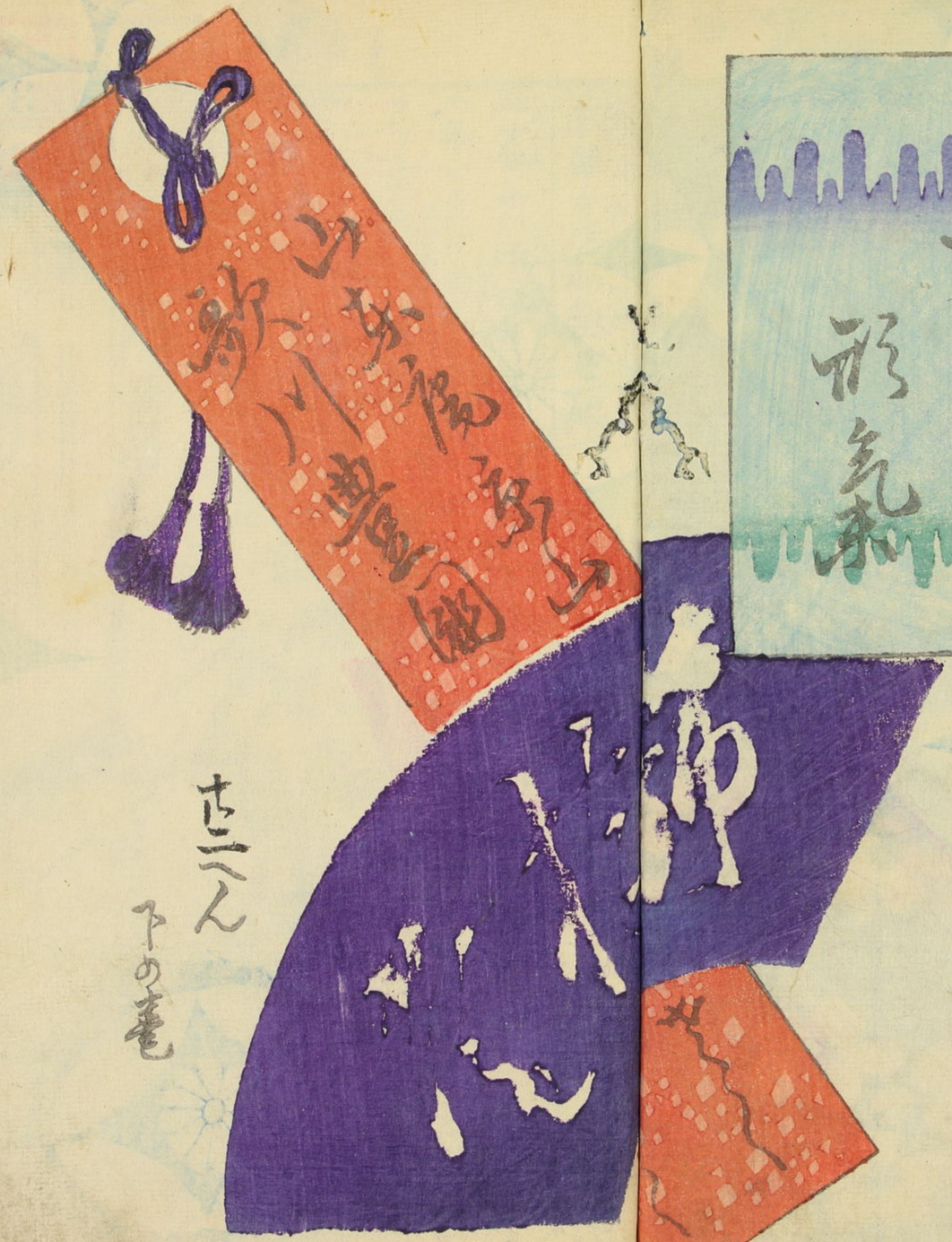
教草女房訓蒙廿二編

鶴亭秀賀作

棋蝶楼国貞画

へ13
3703
22



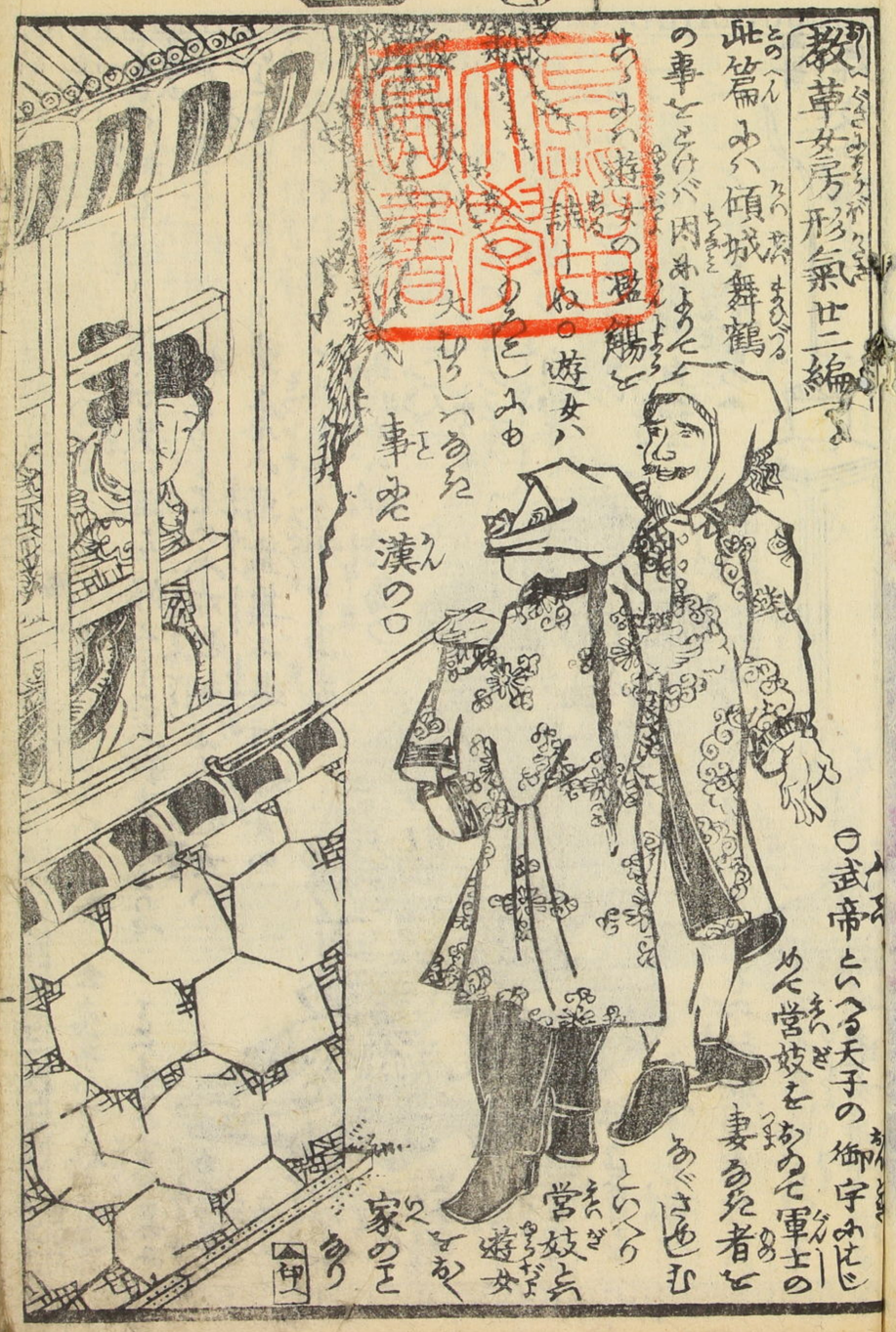
江戸御殿
歌川豊国画

教学
女房
形気

豊国
下の亀

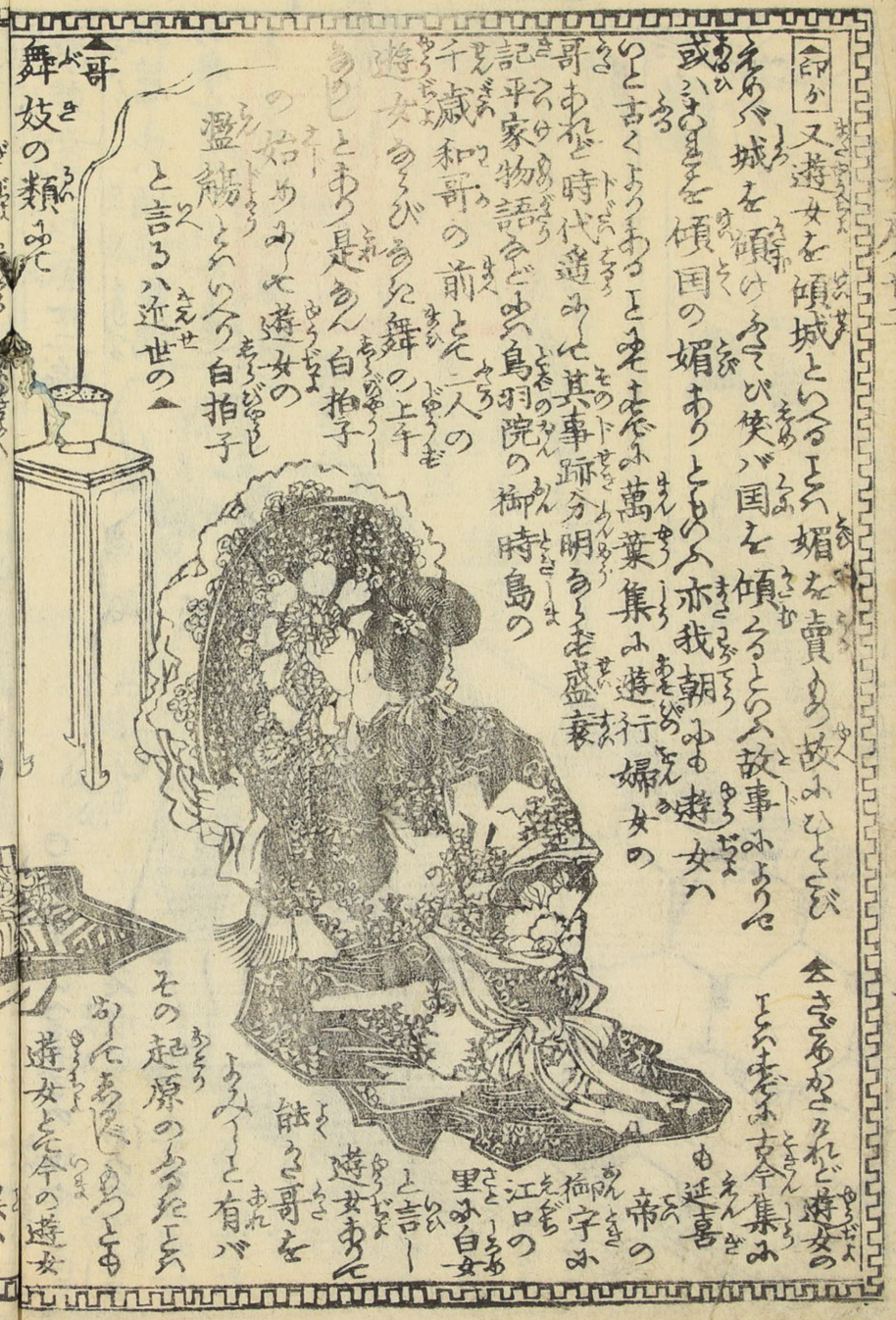
豊国
上の亀

門へ13
號3703
巻22



印か 又遊女を傾城といふ媚を賣る故みひとりで
城を傾け又たび笑ハ国を傾くるとの故事ハ
或ハ美を傾国の媚ありとも人亦我朝も遊女ハ
いと古くよりあるとか古今萬葉集ハ遊行婦女の
哥あれど時代遠みて其事跡分明ならぬ盛衰
記平家物語などハ鳥羽院の御時島の
千歳和哥の前と云二人の遊女ハ舞の上手
なりしとあり是ハ白拍子の始めなり遊女の
澀紙といふ白拍子と言るハ近世の

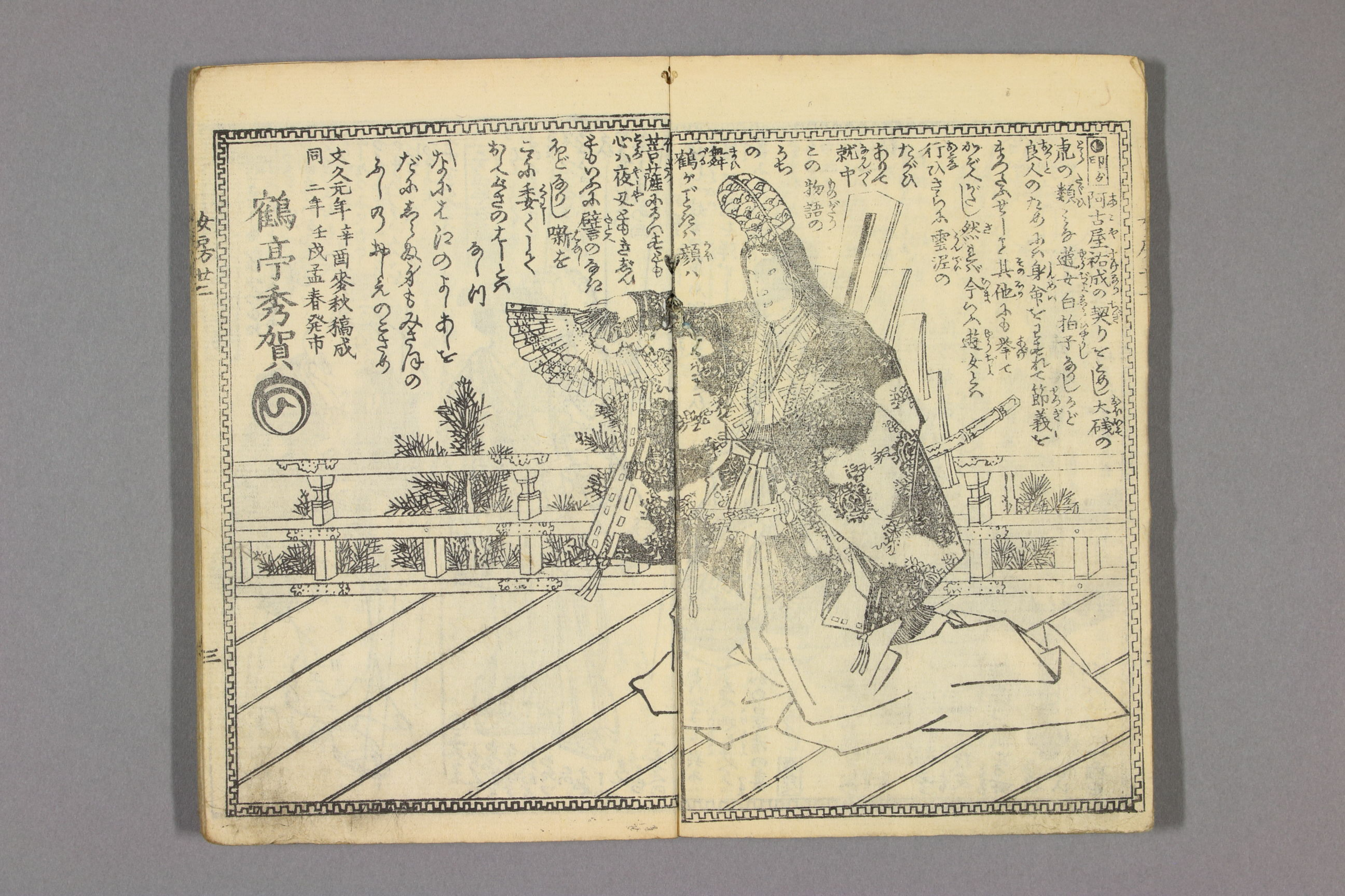
哥舞妓の類



▲さるゆかしきれど遊女の
ことハ古今集ハ
も延喜帝の
御字ハ江口の
里ハ白女
と言し
遊女あり
能き哥を
よみ有バ
その起原のよしとハ
あれども
遊女と今の遊女

はしハ妓女の輩ハ郢曲をうたひ
筆琵琶を弾ぜしはしふるき
書ハ見へず
さてもれバ古の
白拍子ハ
今ハ人藝子の
類ありて狩衣烏帽子
白拍子の始ハ兼好法師の
徒然草ハ
磯の禅師又其
静ハ
始まると
あり
何ぞ是非と

の是ハ絵とし
の遊女
とハいさゝか異ハ
なれ通ちがひ
かの景清の妻
と言し
印へ
化粧者
の圖ハ我友
柳園の藏書所
得てこれハ
縮圖ハ

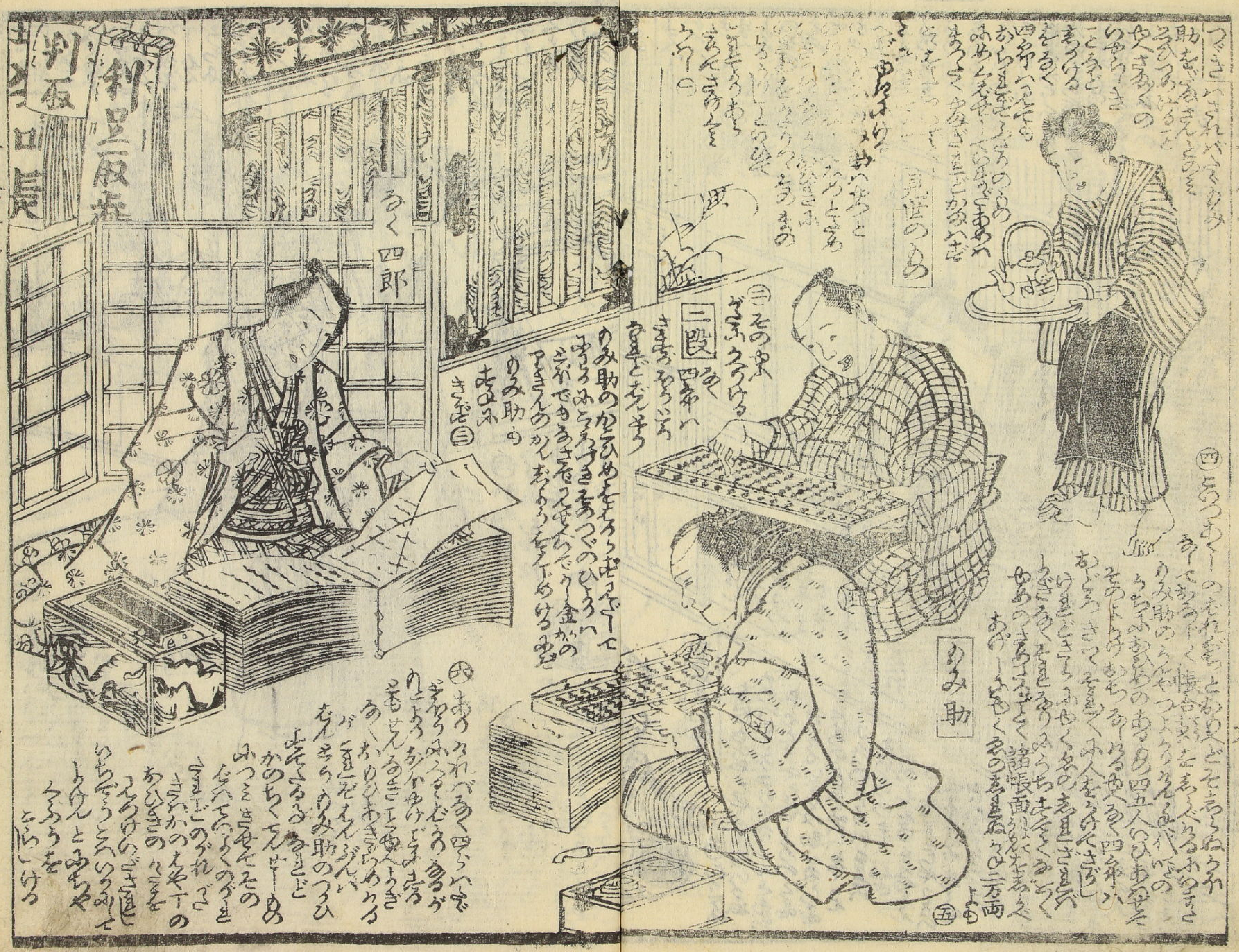

阿古屋祐成の契りと云大磯の虎の類なる遊女白拍子あしらど良人のためあへ身命をとゝまれて節義とまつさふせーを其他ふも挙てかぞへ尽し然るに今の人遊女ゝ行ひさらふ雲泥のなげびありて就中この物語のうちの舞鶴ゲごろ人顔ハ
菩薩ふるのもちも心ハ夜叉ふもき者もまりふふ壁のうちをどり嘶を
こふふ委くしく
あへなきの本ゝ
なふそこのようあと
だふあゝ多ふもみさをの
ふの神えのこさあ
文久元年辛酉麥秋稿成
同 二年壬戌孟春発市
鶴亭秀賀

教草女房形氣二十二編
初段

るく四郎
ぎこく
ぞち八

のみ助

きく四郎
きふく


判取
のみ助

三段

わみ助

おく四郎

おくし四郎つま
かやき
おやたつき人
おくち

大福帳
茶屋控
人船帳
まんどころ
四段
なんどころみ助
まひづるの男
うりかたなる

秀賀作　國貞画

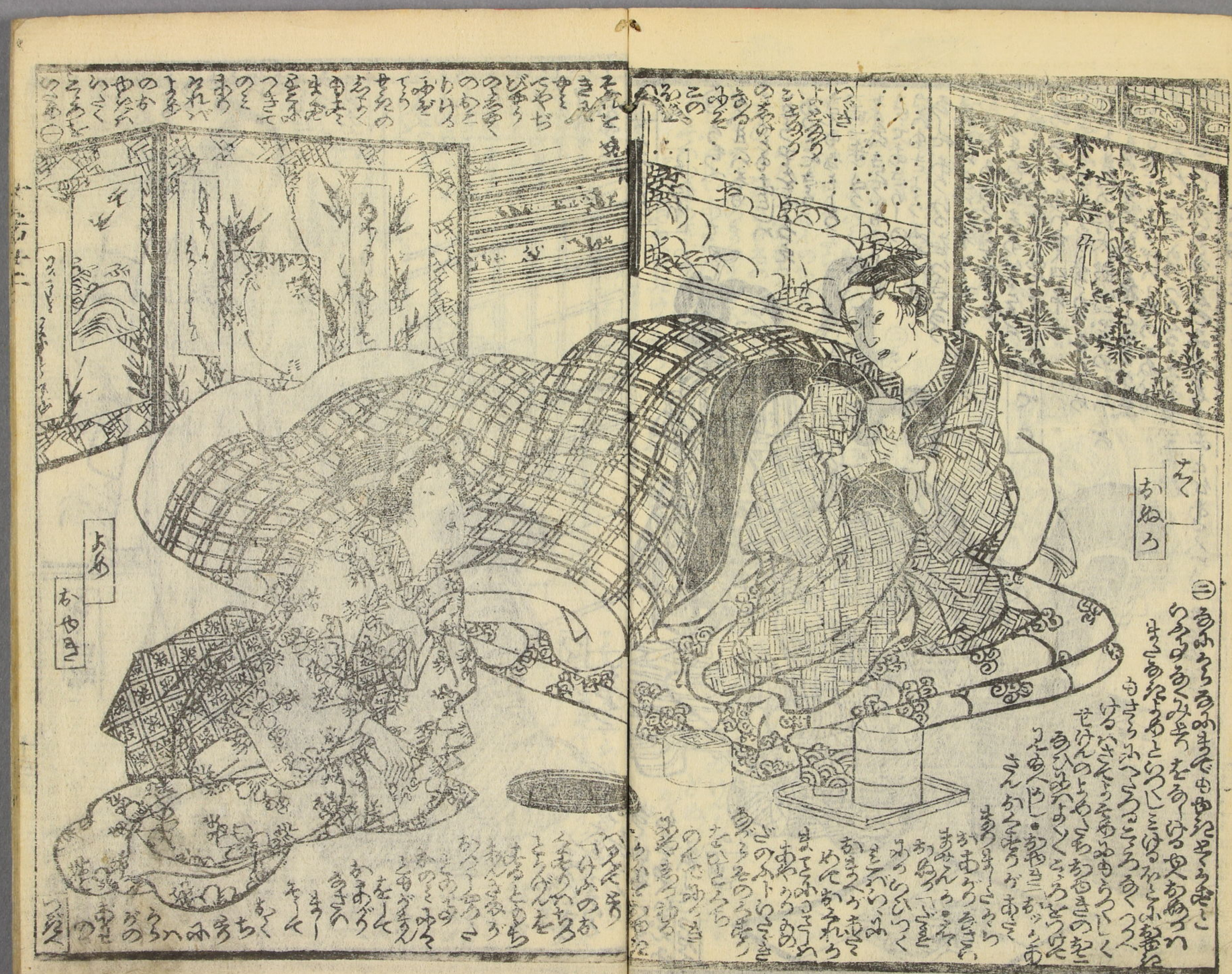
六段

七段

下女

かしら

かてと


よあ
おやき
おねろ

つぎき
あく四郎
つぎき人
おとち
堪忍
ちゆき
八段

むとのの
あく四角

おやさま

おくち
(二)さてもえんりょなくもあるものかな
(三)えゝまくもあるこそれどもあるこそ
(四)

おかめ
おかめ
おかめ

たろうくや
たろうさん
おくさま
おかやさ

つき
四郎
助
のみ
十八

おくち
おせき
十殿
次へ

つぎ
のみ助
おたね
おたま
のみ助
おたね
たらふくや
たらふくや

鶴亭秀賀作

楳蝶樓國貞画

御所櫻梅松録　十一編　鶴亭秀賀作　楳蝶樓國貞画
花の下の恋遊びの続き　九編　貞之助初恋　十編　松の前の花　十一編　松の前の姫心精頭
重梅御前の稲荷の一段
御近三右君御怒傷の事ハ終ル　十二編　応賀作
奥女中　落入ハ吾君様の本御再誕を誌す
御所奉公　乃日記　十二編　応賀作　六尾　芳虎画
教草女房形氣　三編　秀賀作　四編　國貞画
花袭狐草紙　三編　魯文作　五編　芳虎画
童會解題嘶　四編　魯文作　五編　芳虎画

庄　地本錦繪問屋　錦橋堂　山田屋庄次郎板
芦南傳馬町二丁目